

RSNA 2011

Celebrate the Image



大会長を務めた
Burton P. Drayer, M.D.



Opening Session Panel の
Geoffrey D. Rubin, M.D.



Opening Session Panel を
行った Zahi Adel Fayad, Ph.D.



Opening Sessionが行われた Arie Crown Theater

は、“Bleeding Edge Imaging and Therapy in Vascular Disease”をテーマに講演した。Fayad氏は、CTやMRIなどのモダリティによる atherosclerosis のプラークの評価について解説を行った。

初の試みとなった “Virtual Meeting”

RSNA 2011の大きなトピックの1つは、マコーミックプレイスの“外”で行われた。それが“Virtual Meeting”である。これはRSNAの国際化が進んでいることから、来場できない海外の学会員などを対象にして、インターネットでセッションや講演、Technical Exhibitsに参加できるもので、今回が初めての試みである。会期中には3290人が参加した。

RSNAの国際化は、演題数の増加にもつながっている。今回の応募演題数は、2010年を上回る1万2334題となった。

その内訳は、Scientific Presentation (Paper, Poster) が7188題、Education Exhibitが5146題となっている。採択演題数は、Scientific Paperが1831題、Scientific Posterが1188題、Education Exhibitが2124題となった。この中から11月30日には、Education Award Winnersがレイクサイドラーニングセンターで発表された(50～51頁参照)。

Technical Exhibits には 前を上回る685社が出展

RSNAでもっとも華やかな場所と言える Technical Exhibitsであるが、今回もサウスビルディング(ホールA)、ノースビルディング(ホールB)、レイクサイドセンター(ホールD)の3会場で行われた。出展社数は、初出展となる119社を含む685社。これは2010年の出展社数を上回る数字であり、これに伴い

展示面積も46万3150平方フィートと、前年よりも拡充された。さらに、出展社の参加者も前回の2万1499人から増加し、2万2509人を記録した。

◎

出展社数の増加などにより、2010年の5万8044人を上回る5万9097人が参加したRSNA 2011。2008年のリーマンショックで落ち込んだこれらの数字も徐々に回復し、海外からの参加者も数多く見られ活気が戻りつつある。この勢いを持続するためにも、さらなる技術開発と臨床応用による放射線医学の進歩が期待される。

その成果を見ることができるであろうRSNA 2012は、Texas Children's HospitalのGeorge S. Bisset III, M.D.が大会長を務め、11月25日(日)～30日(金)の日程で、マコーミックプレイスを会場に開催される。

2011年11月27日(日)～12月2日(金)の6日間、米国イリノイ州シカゴ市のマコーミックプレイスを会場に、第97回北米放射線学会(RSNA 2011)が開催された。テーマは“Celebrate the Image”。大会長はThe Mount Sinai Medical CenterのBurton P. Drayer, M.D.が務めた。本特集では、「エキスパートによるRSNA 2011ベストレポート」と題し、会期中に話題となったテーマや最新技術を専門家の視点から報告する。なお、Technical Exhibitsについては、1月号別冊付録『RSNA 2011 ハイライト』、インナビネット「RSNA 2011スペシャル」(<http://www.innervision.co.jp/rsna2011/>)も、併せて参照されたい。

Celebrate the Image が 2011年のテーマ

RSNA 2011の初日である11月27日には、Arie Crown Theaterで恒例のOpening Sessionが行われた。この中に設けられたPresident's Addressにおいて、Drayer大会長は、大会テーマにちなんで“Celebrate the Image: How We Changed the Face of Health Care”と題した講演を行った。Drayer

大会長は、CTやMRIなどのモダリティの発展の歴史を振り返り、その歩みが放射線医学の進歩と結びつき、予防、診断、治療に大きく貢献してきたと述べた。そして、高齢化などにより世界的に医療費が膨張する現状を踏まえて、予防や早期診断・治療によって医療費を削減するための医療技術や医薬品の開発に放射線医学は役立つかとして、バイオマーカー、イメージガイド下インターベンション、CADといった技術の発展が重要であると説明した。

Opening Sessionではこのほか、“Opening Session Panel—Multimodality Imaging of Atherosclerosis”と題したセッションが設けられ、Matthew A. Mauro, M.D.が座長を務め、2題の講演が行われた。まず、Geoffrey D. Rubin, M.D.が“CT Angiography: 20 Years Old and All Grown Up”をテーマに登壇。CTAの歴史を概観するとともに、その将来について、被ばく低減技術のさらなる進歩が重要だと述べた。続いて登壇したZahi Adel Fayad, Ph.D.



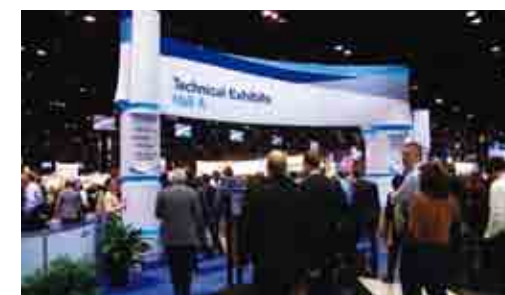
領域別に色分けされたレイクサイドラーニングセンター



レイクサイドラーニングセンターでの発表に集まる参加者



Education Award Winnersの発表



Technical Exhibits会場の1つであるホールAのゲート